

移住漁民と移住漁業

与論島漁民の屋久島移住とその漁撈技術

Migrated Fishermen and the Migratory Fishery

野地恒有

はじめに

①与論島漁民の移住とロープ引き漁の開始

②ロープ引き漁の漁撈技術

③移住漁業の漁撈技術的特徴

おわりに

[論文要旨]

本稿では、屋久島（鹿児島県熊毛郡屋久町）における与論島（鹿児島県大島郡与論町）出身漁民の移住と彼らによって開始された漁法（ロープ引き漁）を対象とし、移住地域で構築される漁業活動の特徴を漁撈技術という点から明らかにする。屋久町春牧では、1930年代後半から与論島麦屋地区出身の漁民の移住が始まった。彼らは、1950年代後半にロープ引き漁を開始し、その新漁法を屋久島の主要な漁業に成長させた。ロープ引き漁は、追い込み網、待ち網、ダーツ（和名ダツ）漁といった伝統的漁法を技術的基盤として、人間や石による追い込みを簡略にして、脅し具（ビロ）による追い込みが生かされた漁法である。1970年代後半になると、ロープと網の巻き上げが機械化された。漁撈技術の簡略化と省力化によって、ロープ引き漁は屋久島周辺地域へ普及した。

移住漁民が移住地域でおこなう漁業を移住漁業と、移住先の地元漁民（在来漁民）がおこなう漁業を在来漁業と定義する。在来漁業がすでにおこなわれている地域への移住の場合、移住漁民は、在来漁業として受容可能な漁業を創出することによって定住に成功したとみることができる。移住漁業の展開には、その漁業が、在来漁民に集団的に受容され、その地域全体の漁業生産に占める割合の高い漁業となる必要がある。これを移住漁業の在来漁業化という。移住漁業の在来漁業化によって、移住漁民は地域社会に組み込まれ、定住したとみることができる。このような移住漁業の特徴として、ロープ引きの漁撈技術から、単一・周年性、開拓性、補完性、汎用性を抽出することができる。